

遺跡発表 3. 佐倉市

城 城 跡

— 土壇の謎を追う —

上席調査研究員 日 暮 冬 樹

城城跡の立地と周辺遺跡

城城跡は、印旛沼に注ぐ鹿島川の支流高崎川から派生する南部川沿いの台地上にある。城城跡周辺には、金部田城跡・石川館跡・時崎城跡といった城跡があり、この場所は、市内でも有数の城跡所在地域である。やや北部の離れた台地上には、六崎^{むつざき}に所在した大福寺があったとされる高岡大福寺遺跡がある。

城城跡の西部には、周辺の信仰を集めた麻賀多神社・円城寺跡といった社寺が所在する。さらにその西方には、近世の年貢米輸送ルートとして知られる佐倉道が南北に走り、その沿道には六崎貴舟台遺跡^{きふねだい}・六崎外出遺跡^{そとで}があり、台地を整形区画し、掘立柱建物跡や地下式坑・土坑を設けている状況が確認されている。

城城跡周辺は、中世期に印東^{いんとうのしょう}荘六崎郷に属していたと考えられ、15世紀前半には、領主であった六崎氏が、香取社の造営料を納入している。

城城跡の現況と発掘調査の概要

城城跡は、堀(1)と土塁(2)によって、細長い尾根を台地基部から断絶させている。台地基部側も台地上を削平して平坦面を造り出し、曲輪を形成している可能性も指摘されているが、現状でははっきりとした城の遺構は認められない。

城城跡には、上幅約15mの堀に設けられた土橋(3)から入る。しかし、土橋の正面には高さ約2mの土塁(2)があり、そのまま真っ直ぐに城内へ入ることは出来ないようになっている。城内には、中央部に土壇があり、西側縁辺部にも土の高まりがある。城の東側斜面部には、帯曲輪状の平坦地(4・5)が認められる一方、城の西側は、谷津の中に平坦地(6)が所

在し、往時には屋敷があったことが考えられている。

城城跡の発掘調査が始めて行われたのは、昭和54年(1979)である。鉄塔建設に伴って、北側斜面部400㎡が調査されたが、縄文土器がわずかに出土したに過ぎず、中世期の発見はなかった。

平成23年には個人住宅建設に伴い、事業範囲2,376㎡の確認調査(第2次)が実施された。この調査結果を受けて、台地上の平坦地705㎡を佐倉市教育委員会、土壇部分529㎡を当センターが行うことになった。

平成24年2月から5月まで行われた佐倉市教育委員会による本調査(第4次)では、中世土坑12基・ピット11基・溝1条・虎口1ヶ所・掘立柱建物跡2棟、近世土坑6基が発見された。

当センターによる調査は、土壇部分を半分264.5㎡ずつに分けて、2月に第3次調査、5月に第5次調査が実施された。その結果、粘土採掘坑4基、奈良平安時代住居跡2軒・竪穴状遺構1基、中世方形土壇1基・土坑7基・ピット47基・溝状遺構1基が発見されている。

出土遺物は、15世紀中頃の遺物を主として、青白磁・青磁といった貿易陶磁、緑釉皿・折縁皿・平碗といった瀬戸美濃産陶器、常滑産の容器類、かわらけが出土した。出土遺物には被熱しているものが見られ、内耳^{ないじ}土器や摺鉢といった生活用具がほとんどない。貿易陶磁などは平坦地に多く出土し、土壇上では出土していない。一方、原始古代の遺物は、平坦地よりも土壇の盛土内から多く出土した。これは、周囲の遺構が所在した土層を削って、土壇の盛土に使用したためと思われる。

土壇の様相

調査された土壇は、方形を呈して、一辺約 20m、高さ約 1.8mの大きさであった。土段は、調査前には古墳ではないかとも言われ、城郭研究においてもその性格は、はっきりと示されなかった。

確認調査の結果、土壇には周溝等の古墳の特徴を示す状況が検出されなかった。しかし、調査が進むと、土壇上には、中世の遺構、奈良平安時代の遺構が見つかり、その下層には粘土採掘坑が掘られていることがわかった。土壇は、古代の歴史が刻まれた地山を方形に削りだし、盛土をしており、その時期は中世期になることが想定された。

土壇の削りだされた基部は、一辺約 15m、高さ約 1.5mを測る。盛土は高さにして約 30cmに過ぎない。土壇北西部には、地山が削り残された張出部が作られている。検出された中世遺構は、盛土上層と下層に形成されたものに分かれると思われるが、その区別は必ずしも明確ではない。

土壇上には、粘土や焼土の散在が見られた。粘土や焼土を除去すると、その下からピットが現れることが多く、ピットの覆土にも粘土や焼土が多く含まれているものがあつた。土壇上には建物跡は検出されなかったが、検出されたピットや土坑の一部は、柵列等になる可能性が高い。

土壇の北東部から北部において、土壇の盛土下部に黒色土が土壇裾に沿うように確認された。この黒色土は、土壇の南部・北西部には確認されず、黒色土の広がりには限定されたものであつた。この土が、一般的な塚の下部に確認される旧表土と同様なものと考えれば、城城跡の土壇形成を考えるうえで参考になるものと思われる。

城城跡平坦部の状況

城城跡の平坦部にて、注目される遺構は、溝状遺構 1 条と掘立柱建物跡である。溝状遺構は、長さ約 11.5m、上幅約 1.8m、深さ約 0.7mの堀跡と思われる。土壇と軸が同じ方向であり、使用期間が一致する時期があつたと思われる。溝状遺構の掘り残された部分が土橋であれば、土壇は土橋を横から睨む防

御施設となり得るだろう。また、掘立柱建物跡は、建替えられた 2 軒が想定できる。これらの建物跡は、土壇と堀によって区画防御され、その大きさと出土遺物の様相から、日常の居住空間ではないように思われる。この溝状遺構と掘立柱建物跡は、土壇の盛土下部にて検出されたことも興味深い。

溝状遺構の西側縁辺部には、掘り残された部分がある。その北部には、土塁状の土の高まりが確認されており、この西側縁辺部では遺構が検出されていない。この土の高まりは、特に盛土をしていないが、土壇の形成状況を考慮すれば、削り出された土塁ではないか。その土塁が城城跡の西側縁辺部に連なっていたと考えれば、この溝状遺構の未貫通部分を説明でき、虎口までその土塁が伸びていたことが想定できないだろうか。

また、埋没谷は、人為的な掘削は認められず、堀跡とは考えられないが、土壇の盛土と同じ土によって、この谷は埋め立てられており、土壇の築造と谷の埋立は、関連していることが考えられる。虎口に接する部分に小谷がある重要性を無視できない。

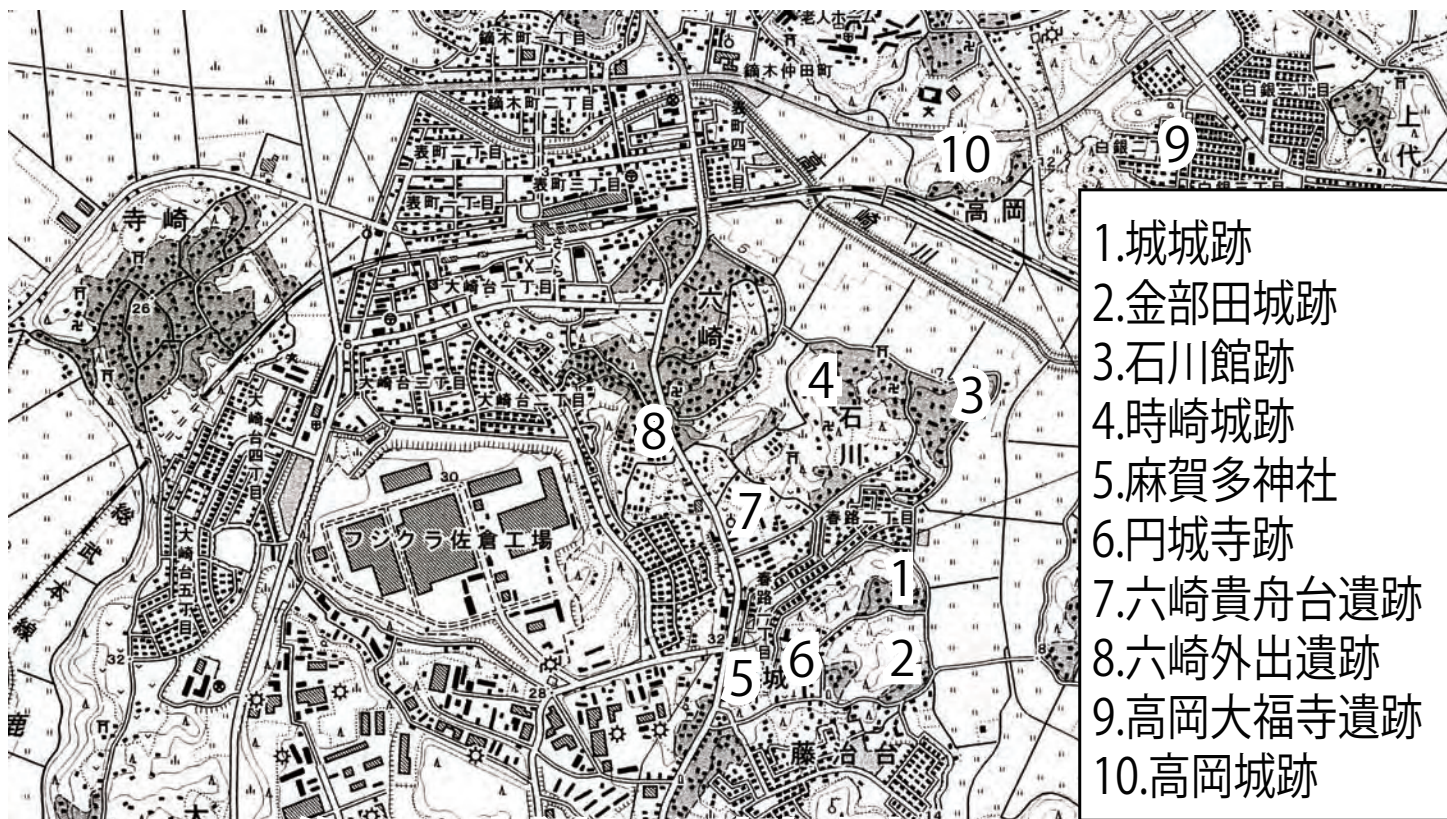
まとめ

最後に、現段階において考えられる調査範囲内における遺跡の変遷を記してまとめにしたい。

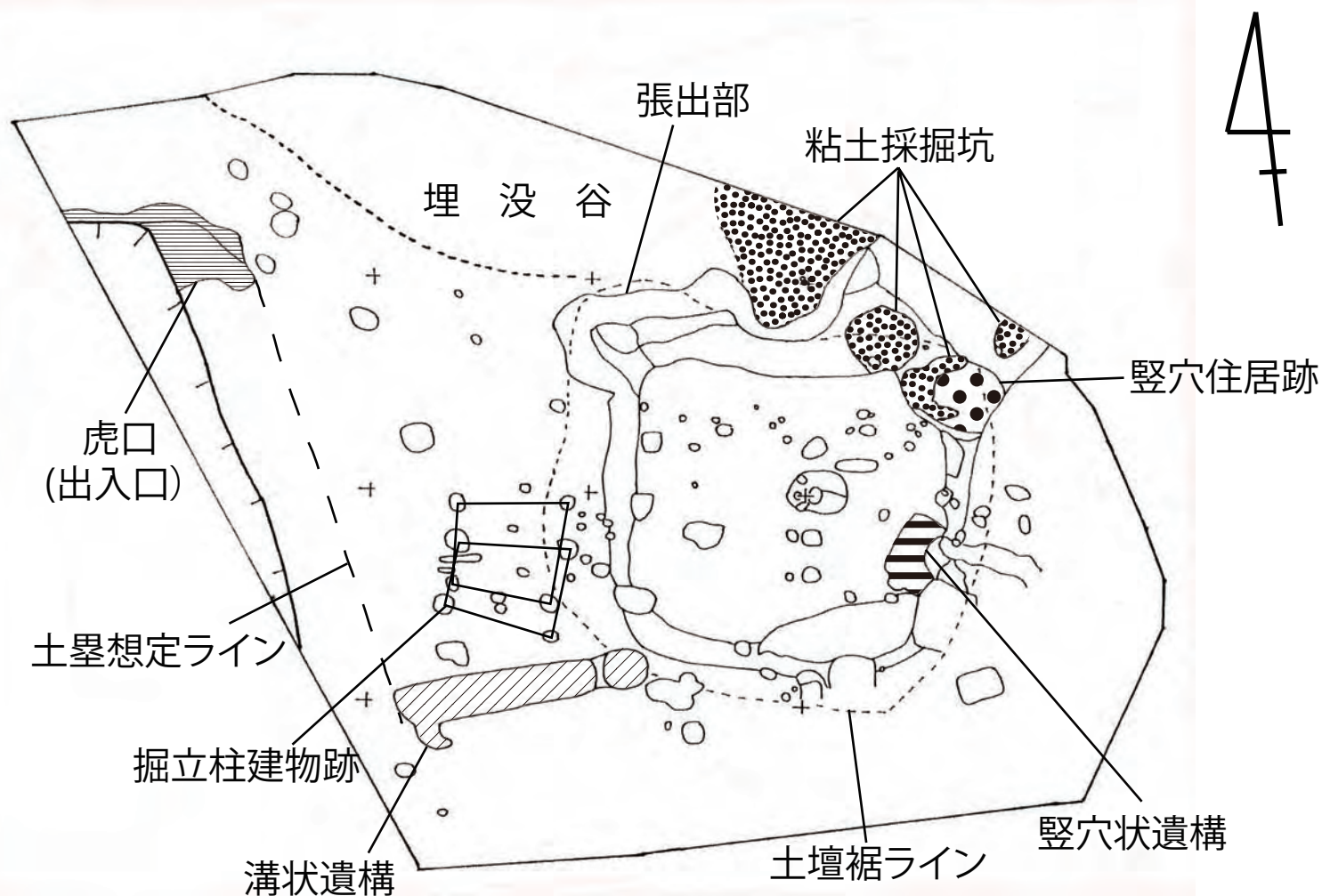
最初に、城が築かれる前にこの台地上では、原始古代に粘土採掘が行われて、奈良平安時代には集落が営まれていた。

15 世紀中頃の築城直前には、台地を削平し、盛土をして方形土壇が築かれたと思われる。それから間を置かず、築城が計画され、土壇の西から南裾が削られ、平坦地が作られた。その平坦地に、掘立柱建物・土坑や堀・土塁が構築され、城の施設が整備された。この時に、土壇の北西部張出部が形成され、土壇自身も城の防備に使用されたとと思われる。

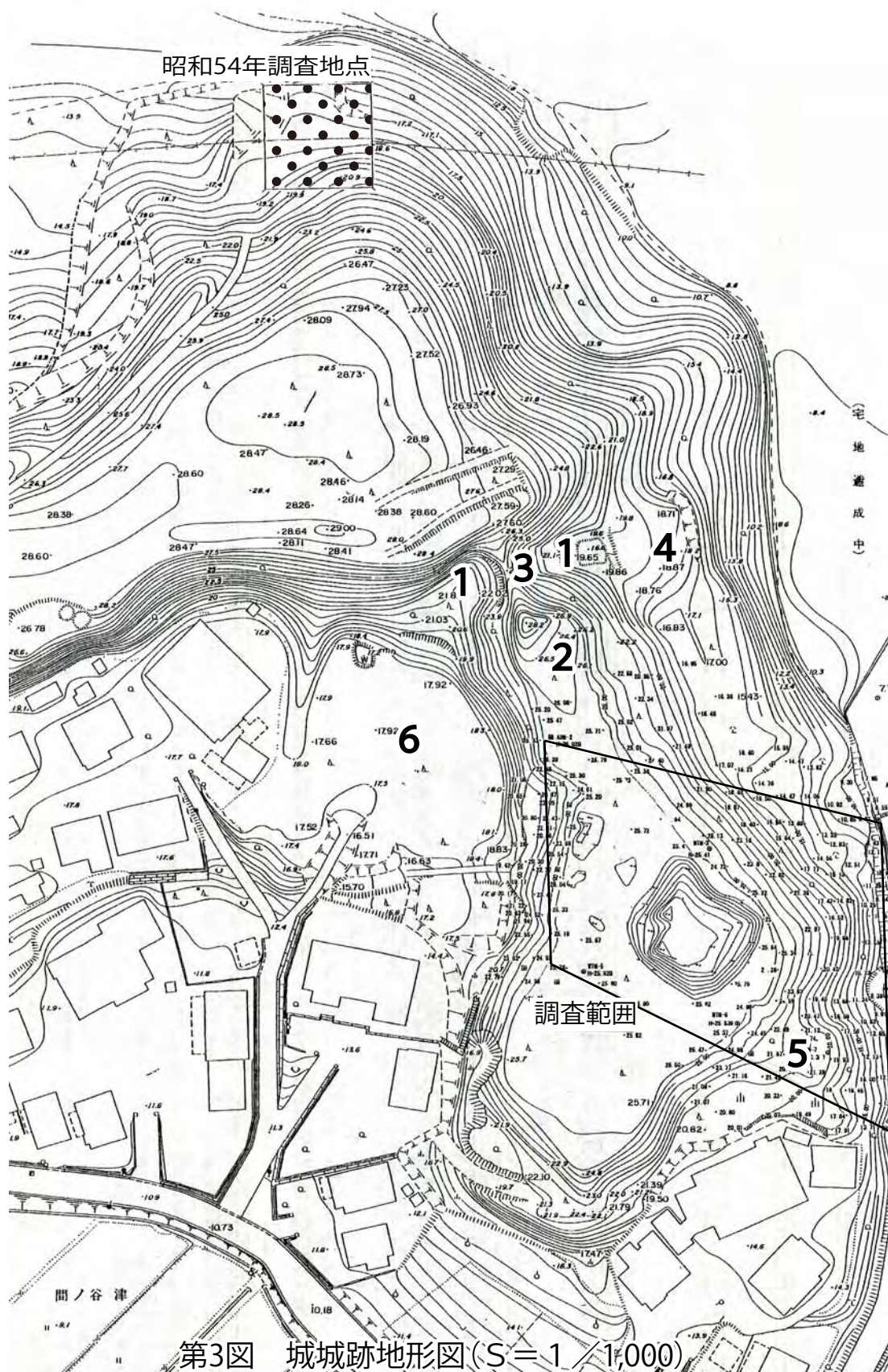
その後、城は短期間しか使われず、建物は取り壊されて、障害となる堀や谷は埋められ、土塁は削られたものと思われる。同時に土壇は再度方形に盛り土し直された。一旦戦いの場となった台地であるが、元来の平和な営みを取り戻したことが推定される。



第1図 城跡と周辺遺跡・史跡



第2図 城跡第3～5次調査 遺構配置図(S=1/400)





東側上空からみた城跡



第4次調査ピットから出土した遺物



第4次調査検出 虎口



第4次調査検出 溝状遺構



4次調査検出 掘立柱建物跡